

## 自己意識特性が正確な能力診断が可能な課題の 選好に及ぼす影響<sup>1)2)</sup>

### —診断結果が他者に公表される状況と 公表されない状況における影響の差異—

Effects of self-consciousness on the task preferences with diagnosticity of  
his/her own ability when the diagnosed ability is exposed to the others

笹 山 郁 生      松 島 知 栄<sup>3)</sup>

Ikuo SASAYAMA      Chie MATSUSHIMA

学校教育講座      株式会社パック・エックス

(平成17年9月30日受理)

自己意識特性と診断結果の他者への公表が、自己査定の行動にどのような影響を及ぼすのかについて検討するために、大学生512名を、①自己の能力の診断結果を自分だけが知ることのできる状況、②診断結果を自分と他者の両方が知る状況、③診断結果を他者のみが知る状況の3条件にランダムに割り当てた準実験を実施した。その結果、私的自己意識の高い個人は、常に自己の能力が明確になる課題を選好するのに対して、公的自己意識の高い個人は、診断結果が他者に知られる可能性のある場合には、自己の低能力が明らかになる課題を相対的に好まなくなる傾向にあることが示された。状況要因と性格特性の交互作用が、自己査定の行動に影響を及ぼす可能性について考察した。

key words : 自己査定動機, 自己査定の行動, 公的自己意識, 私的自己意識, 診断結果の公表性

自己査定理論 (self-assessment theory; Trope, 1975, 1983) によると、人は、自尊心に対してどのような意味があろうとも、つまり、たとえ正確な能力を知ることによって、自己の自尊心が低下する可能性があったとしても、環境に効果的に対処するため、自己の能力の不確実性が低減されるような情報を選好する傾向がある。このように、自己の能力の不確実性が低減されるような情報を収集する行動を自己査定の行動という。

自己査定理論に基づいてわが国で実施された研究は、設定された条件によって多少の差異はあるものの、実験参加者全体の40～60%が、自己の能

力を明確に知るために、自己査定の行動を取ること明らかにしている (越, 1994, 1996; 沼崎, 1991, 1992)。また、沼崎・工藤 (1995) では、能力のみならず、性格特性に関しても、自己査定の行動の取られることが明らかにされている。

しかしながら、人間は、常に自己査定の行動を取るわけではない。前述した研究を概観すると、情報収集する能力に対して、明確な目標をもちかつその達成可能性を高く認知するほど (越, 1994)、当該能力が重要で有益であると知覚されるほど (沼崎, 1992)、自己概念と合致する場合ほど (沼崎他, 1995)、自己査定の行動が取られている。ま

1) 本研究の研究計画を立てるにあたり、東京都立大学 (現首都大学東京) の沼崎誠先生から貴重なご助言をいただきました。ここに記し、感謝の意を表します。

2) 本研究は、第1筆者の指導のもと、第2筆者が平成16年度に福岡教育大学初等教育教員養成課程教育・心理・幼児教育コースに提出した卒業研究の内容に基づいている。

3) 平成16年度福岡教育大学初等教育教員養成課程教育・心理・幼児教育コース卒業

た、沼崎(2001)は、「情報収集する自己概念が修正可能である場合、重要な目標を設定する段階の場合、自己概念が脅威にさらされていない場合、には自己査定傾向が優位になる」と述べている。すなわち、自己の能力や性格特性について、その対象となるものが個人にとって重要であり、また、それを獲得する可能性、改善する可能性が高い場合には、自己査定の行動が取られやすいと考えられる。

ところで、これら自己査定の行動が取られやすい状況は、自覚状態 (self-awareness ; Duval & Wicklund, 1972) と類似している。自覚状態になると、人は、自己の感情や感覚に敏感になり (Scheier, Carver, & Gibbons, 1979)、過去の記憶をよく思い出し (Pryor, Gibbons, Wicklund, Fazio, & Hood, 1977)、出来事の原因や責任が自分にあると判断しやすくなる (Duval & Wicklund, 1973) と、押見 (1992) は整理している。

このように、人は自覚状態になると、自己に関連性の強い、かつ、重要な側面について敏感になり、その側面において、自分が自ら望ましいと考える状態にあるか否か、自己点検をする。そして、その側面が改善可能な場合、望ましい自己へ接近しようとするのである (押見, 1992)。

この自覚状態に関しては、そのなりやすさ、すなわち、自己に注意が向きやすい程度には、自己意識特性 (self-consciousness ; Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975) という個人差のあることが知られている。自覚状態と自己査定の行動を取りやすい状況とが類似しているのならば、自覚状態になりやすい個人、すなわち、自己意識特性の高い個人は、自己査定の行動をより取りやすいのではないかと考えられる。また、自己に注意を向けやすいということは、自分自身に興味があることを意味していると考えられるので、自分自身がどのような人間なのかを確認するために、自己査定の行動をより選好するということは、十分考えられることである。

そこで、本研究では、自己意識特性の高い個人は、自己意識特性の低い個人と比較して、自己査定の行動を取りやすいかどうかについて検討することを第1の目的とする。この点について、以下の仮説を設定した。

仮説1：自己の能力が診断可能な課題を選択する際に、自己意識特性の高い個人は、自己意識特性の低い個人と比較して、自己の能力が

高いことを示すものであれ、低いことを示すものであれ、診断性の高い課題をより選好するであろう。

ところで、自己意識特性には、他人から見られている自分を意識しやすい傾向、つまり、自分の容姿や振る舞い方に注意を向けやすい傾向の個人差である公的自己意識 (public self-consciousness) と、自分の感情や態度、考えていることなど、内的で他人は直接知ることができないような、自己の私的側面に注意を向けやすい傾向の個人差である私的自己意識 (private self-consciousness) のあることが知られている。

公的自己意識の高い個人の特徴と、私的自己意識の高い個人の特徴について考えると、どちらの自己意識特性が高いのかによって、自己査定の行動が取られやすい状況が異なってくるのではないかと考えられる。

公的自己意識の高い個人は、自分が他者からどのように見られているのかということに敏感である。したがって、自分の能力が他者に公表されるような状況では、自己の能力が低いことを他者に知られることを避けるために、他者に能力を知られることのない状況と比較すると、自己査定の行動が取られにくくなるのではないかと考えられる。

自己の能力が他者に公表される状況における自己査定の行動について検討した辻岡・遠藤 (1994) は、能力の診断結果が公表される状況では、実験参加者の36%が診断結果が公表されない状況時において選択した課題とは異なる課題を選択しておき、20%の実験参加者は、低能力が明らかになることを避けるために、診断結果が公表されない状況時に選択した課題よりも簡単な課題を、また16%の実験参加者は、結果が公表されない状況時に選択した課題よりも困難な課題を、それぞれ選択したことを示している。この結果について、辻岡らは、他者からの低い評価や悪い印象を避けるために、実験参加者の一部はわざと困難な課題を選択し、失敗を自己の能力ではなく、課題の困難性に帰属させようとしたと解釈している。辻岡らの解釈に基づくと、自己の能力についての診断結果が他者に公表される場合には、他者からのマイナス評価や否定的印象を避けたいと考える個人は、自己が低能力だということが明らかになる診断課題を避けると考えられる。したがって、他者を意識しやすい公的自己意識の高い個人は、自己の能力の診断結果が公表されるような状況では、

低能力が明らかになる診断課題を避けると予測される。

一方、私的自己意識の高い個人は、自分の内面がどのような状態であるのかということに敏感である。このような個人は、自己の能力を知ることができる機会があれば、その診断結果が他者に公表されるかどうかとは無関係に、自己査定の行動を取るのではないと思われる。

そこで、本研究では、能力の診断結果が他者にも公表される状況において、公的自己意識と私的自己意識の高い個人が、それぞれ、どの程度、自己査定の行動を選好するのかについて検討することを第2の目的とする。能力の診断結果が、他者にも公表されるような場合には、自分のことを知りたいという自己査定動機と、自己の印象を統制したいという自己呈示動機とが葛藤するものと思われる。その際、公的自己意識の高い個人は、他者からの評価を意識するために、自己呈示動機が優先され、自己査定の行動が抑えられると考えられる。一方、私的自己意識の高い個人は、他者からの評価よりも自分自身の能力に関心があるため、自己呈示動機よりも自己査定動機が優先され、自己査定の行動が取られやすくなると考えられる。そこで、本研究では、以下の仮説を設定した。

仮説2：自己の能力が診断可能な課題を選択する際に、その診断結果を自分自身知ることができるが、同時に他者にも公表される場合には、公的自己意識の高い個人は、自己の低能力が明らかになる課題を選好しなくなるだろう。

仮説3：自己の能力が診断可能な課題を選択する際に、その診断結果が自己と他者の両方に公表される場合でも、私的自己意識の高い個人は、自己の能力が高いことを示すものであれ、低いことを示すものであれ、診断性の高い課題を選好するであろう。

ただし、この仮説3は、状況によって限定されると考えられる。能力の診断結果が他者にのみ公表されるような状況では、自分自身、診断結果を知ることができないために、私的自己意識が高い個人でも、自己査定動機ではなく、自己呈示動機が働き、その結果として、自己査定の行動は取られにくくなると考えられる。この点について検討するため、仮説4を設定した。

仮説4：能力診断が可能な課題を選択する際に、診断結果が他者のみに公表される場合には、公的自己意識／私的自己意識の高低にかかわらず、自己査定の行動は取られにくくなるであろう。

本研究では、これら4つの仮説を検討するために、①能力の診断結果が自己のみに通知される条件（以下、通知のみ条件と記す）、②自己と他者の両方に公表される条件（以下、通知＋公表条件）、③他者のみに公表される条件（以下、公表のみ条件）を設定した。

なお、本研究では、実験参加者として大学生を用いることを考慮して、自己査定動機を喚起させやすい能力、つまり、多くの大学生にとって自己関連性が高く、重要、かつ、改善が可能である、といった側面を併せ持つ能力で、その能力の高低について、他者に知られた場合には、多少なりとも抵抗を感じるような能力を設定したかったため、『潜在的恋愛能力』という架空の能力を設定した。また、診断結果を公表する他者についてまったく知らない場合には、相手に能力を知られることをあまり意識しなかったり、たとえ低能力であることを知られたとしても気にしない可能性が考えられる一方で、すでに十分親しい他者の場合には、自己に対する相手の印象を特に統制しようとは思わない可能性が考えられる。また、診断する能力が恋愛に関するものであるために、同性よりも異性からの評価を意識すると考えられる。そこで、本研究では、相手からの評価や印象を最も意識すると考えられる顔見知り程度の異性に診断結果を公表する場面を設定し、このような状況において、自己意識特性が自己査定の行動に及ぼす影響について検討することにした。

## 方 法

**実験参加者** 福岡教育大学の学生512名（女性298名、男性214名、平均年齢19.3歳）であった。これらの実験参加者は、心理学関連の様々な講義の受講生であり、講義時間中に実施された実験にボランティアとして参加した。なお、これらの参加者は、①通知のみ条件175名（女性97名、男性78名）、②通知＋公表条件173名（女性104名、男性69名）、③公表のみ条件164名（女性97名、男性67名）にランダムに割り当てられた。これら各条件の男女比に有意差は認められなかった（ $\chi^2_{(2)}=0.65$ ,  $n.s.$ ）。

**実験実施期間** 2004年11月初旬であった。

**能力診断課題** 本研究では、『潜在的恋愛能力』という架空の能力を設定した。この『潜在的恋愛能力』は、「会話能力」「セックス・アピール能力」「異性をコントロールする能力」「共感能力」など、恋愛に関する様々な側面を併せた能力であり、自分が考えている「恋愛能力」と、実際の「恋愛能力」（『潜在的恋愛能力』）とは一致しないということを実験参加者に提示し、後日、この能力を測定するためのテスト（『潜在的恋愛能力テスト』）を受検するように思い込ませた。

この『潜在的恋愛能力テスト』の特徴は、沼崎（1992）にならった。具体的には、このテストがアメリカで最近開発されたもので、「能力の高い人」と「能力の低い人」とを弁別するために考案されたこと、このテストは最高点が100点、最低点が0点、平均点が50点になるように作成されたこと、大学生においては、性別に関係なく、「能力の高い人」と「能力の低い人」とが50%ずつになるようにテストは構成されていることという情報が提示された。

**実験条件（診断結果の公表性の操作）** 本研究では、実験参加者に配布した小冊子中の教示文によって、実験条件を操作した。なお、本研究で設定した条件は、以下の3種類であった。

①通知のみ条件：実験参加者本人のみが、自分の『潜在的恋愛能力テスト』の診断結果を知らされる条件。

②通知＋公表条件：実験参加者本人と、テスト受検後に実施される『異性との会話』実験でのパートナーの両者が、互いに両者の診断結果を知らされる条件。

③公表のみ条件：実験参加者と会話実験のパートナーは、互いに相手の診断結果を知らされるが、自分自身の診断結果は知らされない条件。

**能力診断課題における成功時診断性と失敗時診断性の操作** 課題の診断性の操作方法も、沼崎（1992）にしたがった。

能力の高いことが判明する成功時の診断性と、

能力の低いことが判明する失敗時の診断性を操作することで、全体としての診断性を変化させた異なる4課題（課題A、課題B、課題C、課題D）を準備した。失敗時の診断性は、当該課題において高能力者と低能力者が取る得点範囲の最低点の差、すなわち、全体の平均点以下の得点範囲の重なる部分の量により操作した（高能力者と低能力者がそれぞれ取りうる得点範囲の重なる部分の大きいほど診断性が低くなる）。具体的には、診断性が低い課題では、最低点の差が3に、診断性が高い課題では、最低点の差が19になるように設定した。また、成功時の診断性についても、失敗時の診断性操作と同様に、高能力者と低能力者が取る最高点の差（3：診断性低課題、19：診断性高課題）、すなわち、全体の平均点以上の得点範囲の重なる部分の量により操作した。なお、各能力者の取る得点範囲を表1のAに示した。これらの課題全体としての診断性は、成功時の診断性と失敗時の診断性の合計となり、2つの能力群が取りうる得点範囲の重なる部分の量とは反比例する。この得点範囲の重なる部分の量については、表1のBに示した。

**測定項目** 本研究の分析では、以下の各項目を使用した。なお、本研究では、以下にあげた項目以外の変数の測定も実施したが、それらについては、手続きに記した。

①最もやってみたい課題の選択（課題選択）：4タイプの課題の中から1つを選択し回答。

②各課題をやってみたいと思う程度（課題選好）：4タイプの課題それぞれについて、「とてもやってみたい」から「絶対にやりたくない」までの7段階で回答。

③各課題の結果から、受検者の能力が高いか低いかが明らかになると思う程度（課題の診断性知覚）：各課題について、「非常に明らかになる」から「まったく明らかにならない」までの7段階で回答。

④自己意識尺度（菅原，1984）：21項目について、

表1 能力診断課題における成功時診断性と失敗時診断性の操作

	失敗時診断性			
	低		高	
	成功時診断性		成功時診断性	
	低	高	低	高
A. 得点範囲	(課題A)	(課題B)	(課題C)	(課題D)
高能力者	33 - 70	37 - 74	45 - 66	49 - 70
低能力者	30 - 67	34 - 55	26 - 63	30 - 51
B. 得点範囲の重なる部分 (大きいほど診断性が低い)	35	19	19	3

「あてはまる」から「あてはまらない」までの5段階で回答。

⑤課題を選択した際に、自分のテスト結果を他者に見られることを意識した程度（結果公表に対する意識）：「とても意識した」から「まったく意識しなかった」までの7段階で回答。

**手続き** 実験は小冊子を用いて状況を操作した準実験で、講義時間中に集団で実施した。以後、冊子の進行にしたがって、ページごとの手続きを記した。

第1ページ（表紙）：偽りの目的の提示

この実験の目的が、『潜在的恋愛能力テスト』と実際の異性との会話との関連について明らかにするためのものである、という偽りの目的を実験参加者に理解させるために、表紙に本実験の偽りの目的を記すとともに、実験の概要として、『潜在的恋愛能力テスト』を受検後、顔見知り程度の異性との会話実験に参加してもらうこと、また、実験の内容が複雑であるため、実験者の指示にしたがって進行することという教示を口頭で与えた。

第2ページ…『潜在的恋愛能力』の説明と研究全体の流れの提示

『潜在的恋愛能力』に関する説明文を読ませた後、『潜在的恋愛能力』は、自分では気づいていない様々な側面を併せた能力であり、この能力が高いと異性に好印象を与えることが明らかになっていると説明した。

次いで、研究全体の流れについて、第1日目（本日）は『恋愛能力テスト』の説明と事前調査、第2日目（後日）は恋愛能力テストを受検した後、実験者があらかじめ決定した異性（同じ授業を受講しているが、今まであまり話をしたことのない異性）とペアになって、その相手と会話をしてもらうことを文章で提示した。

第3ページ…本日の研究の流れと『恋愛能力テスト』の説明の提示

『潜在的恋愛能力テスト』の説明文を読ませた。次いで、4タイプの課題から課題をひとつ選択することに対して実験参加者に疑念が生じないようにするために、『潜在的恋愛能力テスト』は通常4タイプの課題を組み合わせでおこなわれるが、今回は時間の都合により、各人ひとつの課題のみをおこなうこと、その際、心理学では自分自身が選択した課題からの方が、他者に決定された課題からに比べ、より正確なデータが得られることが明らかにされているため、4タイプのうち、どの課題を受けたいかについての希望をうかがう、という教示文を読ませた。

第4～5ページ…4課題の特徴の例示

4課題の特徴を、文章と2本の棒グラフによって実験参加者に提示した。グラフの1本は能力の高い人が課題をおこなった場合、90%の確率で取る得点範囲を、もう1本は能力の低い人が課題をおこなった場合、90%の確率で取る得点範囲を示し、また、各棒グラフの右端と左端には33・70など、各課題の最小値と最大値を記すことによって、得点範囲を明確にした。実験参加者の課題に対する理解を深めるために、このグラフの上に説明文を提示するとともに、グラフの下に、各課題の結果、能力の高低が明らかになる程度に関する説明文を提示した。これらをよく読み、各課題の特徴を十分理解するように教示した。

第6ページ…『潜在的恋愛能力テスト』に関する質問への回答

「課題選択」「課題選好」「課題の診断性知覚」の各項目、ならびに、実験参加者本人の『潜在的恋愛能力』の自己認知について回答させた。なお、回答にあたって、前ページの課題の特徴を確認しながら回答してもかまわないこと、また、実験者の指示にしたがって1項目ずつ回答するよう教示した。

第7～9ページ…性格特性尺度への回答

自己意識尺度、ならびに、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度（小島・太田・菅原、2003）の計39項目に回答させた。

第10ページ…会話実験への参加意思表明と「結果公表への意識」への回答

後日実施される予定の会話実験に協力しても構わないと考えた実験参加者に、氏名と電話番号を所定欄に記入させた後、「結果公表への意識」に回答させた。なお、会話実験については、どうしても実験に参加したくない方は無記名でかまわない、と教示した。

実験参加者全員がすべての質問に回答し終わったことを確認したうえで、冊子を回収した。その後、ディブリーフィングとして、『潜在的恋愛能力テスト』というものが実在しないこと、さらに、後日おこなうと告げた会話実験についても実施しないことを告げるとともに、この研究の本当の目的を説明し、実験は終了した。

## 結果

**自己意識尺度の得点化** 主因子法varimax回転によって2因子を抽出した結果、「気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取るほうだ」の1項目

は、いずれの因子においても因子負荷量が低かった（第Ⅰ因子：.065，第Ⅱ因子：.326）。そこで、この項目を除外して再度因子分析をおこない、11項目からなる「公的自己意識」因子（寄与率20.03%）と、9項目からなる「私的自己意識」因子（寄与率15.81%）の2因子を抽出した。因子得点を算出し、「公的自己意識」得点、「私的自己意識」得点とした。この因子得点を用いて、平均値0より大きい得点の実験参加者を、それぞれ公的／私的自己意識高群、平均値0より小さい得点の実験参加者を公的／私的自己意識低群とし、以後の分析で用いることにした。なお、実験条件ごとに見ると、①通知のみ条件175名は、公的高・私的高群49名（28.2%）、公的高・私的低群52名（29.9%）、公的低・私的高群36名（20.7%）、公的低・私的低群37名（21.3%）、②通知＋公表条件173名は、公的高・私的高群46名（26.9%）、公的高・私的低群48名（28.1%）、公的低・私的高群38名（22.2%）、公的低・私的低群39名（22.8%）、③公表のみ条件164名は、公的高・私的高群44名（26.8%）、公的高・私的低群41名（25.0%）、公的低・私的高群49名（29.9%）、公的低・私的低群30名（18.3%）にそれぞれ分けられた。いずれの実験条件においても、群ごとの人数比に有意差は認められなかった（①通知のみ条件； $\chi^2_{(1)}=0.01$ ，②通知＋公表条件； $\chi^2_{(1)}=0.00$ ，③公表のみ条件； $\chi^2_{(1)}=1.76$ ）。

**操作チェック** 3（実験条件：通知のみ／通知＋公表／公表のみ）×2（公的自己意識：高／低）×2（私的自己意識：高／低）の各群別に、「課題の診断性知覚」の平均値と標準偏差を算出し、その結果を表2に示した。

課題の診断性について、実験参加者が正しく理解していたかどうかを確認するために、上述の各群別に、「課題の診断性知覚」の平均値について、Tukey法による多重範囲検定を実施した結果、すべての群において、課題A＜課題B＝課題C＜課題Dの順に、課題の診断性を知覚していた（表2参照）。この結果より、課題の診断性に関する操作は成功していたことが確認された。

表3には、3（実験条件）×2（公的自己意識）×2（私的自己意識）別に、「結果公表に対する意識」の平均値と標準偏差を示した。実験条件によって、「結果公表に対する意識」にどのような差異が認められるのかを知るために、3（実験条件）×2（公的自己意識）×2（私的自己意識）の3要因分散分析を実施した。その結果、実験条件の主効果が有意であった（ $F_{(2,491)}=3.12$ ,  $p<.05$ ）。そこで、Tukey法による多重範囲検定を実施したところ、通知のみ条件と通知＋公表条件との間に傾向差が認められ、通知＋公表条件は、通知のみ条件よりも、診断結果を他者に見られることについてより意識する傾向にあることが示された。また、公的自己意識の主効果も有意であり（ $F_{(1,491)}=27.72$ ,  $p<.001$ ）、公的自己意識高群は低群と比較すると、結果を他者に見られることをより意識していた。

これらの結果より、通知のみ条件よりも通知＋公表条件の方が、他者の目をより意識しやすい傾向にあることが明らかになったが、通知のみ条件と公表のみ条件、ならびに、公表のみ条件と通知＋公表条件との間に有意な差異は認められなかった。したがって、診断結果を他者に公表することによって他者の目を意識させることを意図した実

表2 実験条件×公的自己意識×私的自己意識別「課題の診断性知覚」の平均値（標準偏差）

				失敗時診断性			
				低		高	
				成功時診断性		成功時診断性	
				低 課題A	高 課題B	低 課題C	高 課題D
通知のみ条件	公的自己意識低群	私的自己意識低群		3.22 <sup>a</sup> (1.20)	4.05 <sup>a</sup> (1.33)	4.30 <sup>a</sup> (1.57)	5.16 <sup>a</sup> (1.44)
		私的自己意識高群		3.11 <sup>a</sup> (1.16)	4.29 <sup>a</sup> (1.15)	4.49 <sup>a</sup> (1.10)	5.50 <sup>a</sup> (1.18)
	公的自己意識高群	私的自己意識低群		3.12 <sup>a</sup> (1.13)	4.29 <sup>a</sup> (.92)	4.38 <sup>a</sup> (.93)	5.69 <sup>a</sup> (.94)
		私的自己意識高群		3.16 <sup>a</sup> (1.38)	4.57 <sup>a</sup> (1.19)	4.57 <sup>a</sup> (1.14)	5.72 <sup>a</sup> (1.14)
通知＋公表条件	公的自己意識低群	私的自己意識低群		3.05 <sup>a</sup> (1.10)	4.30 <sup>a</sup> (1.00)	4.46 <sup>a</sup> (.93)	5.44 <sup>a</sup> (1.14)
		私的自己意識高群		3.26 <sup>a</sup> (1.16)	4.45 <sup>a</sup> (.95)	4.45 <sup>a</sup> (1.04)	5.53 <sup>a</sup> (.95)
	公的自己意識高群	私的自己意識低群		2.88 <sup>a</sup> (.96)	4.10 <sup>a</sup> (.86)	4.12 <sup>a</sup> (.89)	5.69 <sup>a</sup> (1.06)
		私的自己意識高群		2.85 <sup>a</sup> (1.21)	4.26 <sup>a</sup> (1.04)	4.43 <sup>a</sup> (.91)	5.87 <sup>a</sup> (.86)
公表のみ条件	公的自己意識低群	私的自己意識低群		3.20 <sup>a</sup> (1.06)	4.10 <sup>a</sup> (.96)	4.13 <sup>a</sup> (.94)	5.27 <sup>a</sup> (1.31)
		私的自己意識高群		2.83 <sup>a</sup> (.95)	4.17 <sup>a</sup> (1.04)	4.31 <sup>a</sup> (1.04)	5.33 <sup>a</sup> (1.16)
	公的自己意識高群	私的自己意識低群		2.90 <sup>a</sup> (1.04)	4.44 <sup>a</sup> (.92)	4.51 <sup>a</sup> (.90)	5.90 <sup>a</sup> (.80)
		私的自己意識高群		3.09 <sup>a</sup> (1.10)	4.41 <sup>a</sup> (.84)	4.39 <sup>a</sup> (1.02)	5.52 <sup>a</sup> (1.07)

\*「課題の診断性知覚」の値は、高得点であるほど、当該課題を診断的と知覚していたことを意味する。  
\*平均値の右肩の英小文字は、Tukey法による多重範囲検定の結果を示した。同一行で同一英小文字が付く各群の平均値間では、5%水準で有意な差がないことを意味する。

自己意識特性が正確な能力診断が可能な課題の選好に及ぼす影響

表3 実験条件×公的自己意識×私的自己意識別  
「結果公表に対する意識」の平均値（標準偏差）

「結果公表に対する意識」			
通知のみ条件	公的自己意識低群	私的自己意識低群	2.97 (1.48)
		高群	2.31 (1.47)
	公的自己意識高群	私的自己意識低群	3.60 (1.76)
		高群	3.55 (1.68)
通知+公表条件	公的自己意識低群	私的自己意識低群	3.08 (1.75)
		高群	3.08 (1.86)
	公的自己意識高群	私的自己意識低群	3.85 (1.88)
		高群	4.22 (1.74)
公表のみ条件	公的自己意識低群	私的自己意識低群	3.03 (1.47)
		高群	2.94 (1.54)
	公的自己意識高群	私的自己意識低群	3.70 (1.68)
		高群	3.32 (1.80)

験操作は、必ずしも成功していないことが示された。また、公的自己意識の高い個人は、低い個人と比較して、他者の目をより意識していたことが明らかになった。

**能力診断課題の選択** 3（実験条件）×2（公的自己意識）×2（私的自己意識）の各群別に、実験参加者が、「最もやってみたいテスト」として、4タイプの能力診断課題の中からどの課題を選択していたのかについて、表4に示した。表4より、いずれの群においても、診断性の最も高い課題Dが、その他の課題よりも好まれていたことが明らかになった（選択率56.67%～89.80%）。

条件や自己意識特性によって、課題の選択率に差異が認められたかどうかを知るために、成功時の診断性が高い課題Bと課題Dを高能力が判明する課題選択とし、成功時の診断性の低い課題Aと

課題Cを高能力が判明しない課題選択として一括し、3（実験条件）×2（公的自己意識）×2（私的自己意識）の対数線型モデルによる分析をおこなった。その結果、公的自己意識高群（ $\chi^2_{(1)}=3.87$ ,  $p<.05$ ），あるいは、私的自己意識高群（ $\chi^2_{(1)}=6.41$ ,  $p<.05$ ）の実験参加者は、各自己意識低群の参加者と比較して、高能力が判明する課題を選択する割合が高かった。また、失敗時の診断性が高い課題Cと課題Dを低能力が判明する課題選択とし、失敗時の診断性の低い課題Aと課題Bを低能力が判明しない課題選択として一括し、成功時診断性と同様の対数線型モデルによる分析をおこなった。その結果、私的自己意識高群の実験参加者は、低群の実験参加者よりも、低能力が判明する課題を選択する割合の-highことが明らかになった（ $\chi^2_{(1)}=9.32$ ,  $p<.01$ ）。

表4 実験条件×公的自己意識×私的自己意識別各課題を選択した人数（%）

			失敗時診断性				計
			低		高		
			成功時診断性		成功時診断性		
			低 (課題 A)	高 (課題 B)	低 (課題 C)	高 (課題 D)	
通 知 の み 条 件	公的低群	私的低群	3( 8.11)	6(16.22)	2( 5.41)	26(70.27)	37(100.0)
		高群	3( 8.33)	2( 5.56)	2( 5.56)	29(80.56)	36(100.0)
	公の高群	私的低群	3( 5.88)	4( 7.84)	4( 7.84)	40(78.43)	51(100.0)
		高群	2( 4.08)	3( 6.12)	0( 0.00)	44(89.80)	49(100.0)
通知 + 公表条件	公的低群	私的低群	4(10.26)	4(10.26)	3( 7.69)	28(71.79)	37(100.0)
		高群	5(13.51)	3( 8.11)	1( 2.70)	28(75.68)	37(100.0)
	公の高群	私的低群	5(10.42)	6(12.50)	4( 8.33)	33(68.75)	48(100.0)
		高群	0( 0.00)	3( 6.52)	3( 6.52)	40(86.96)	46(100.0)
公 表 の み 条 件	公的低群	私的低群	7(23.33)	3(10.00)	3(10.00)	17(56.67)	30(100.0)
		高群	4( 8.33)	3( 6.25)	4( 8.44)	37(77.08)	48(100.0)
	公の高群	私的低群	7(17.08)	7(17.08)	1( 2.44)	26(63.41)	41(100.0)
		高群	3( 6.82)	4( 9.09)	1( 2.27)	36(81.82)	44(100.0)

\* ( ) 内の数字は、各群において各課題を選択した人数の割合を示している。

表5 実験条件×公的自己意識×私的自己意識別「課題選好」の平均値（標準偏差）

			失敗時診断性			
			低		高	
			成功時診断性		成功時診断性	
			低 課題A	高 課題B	低 課題C	高 課題D
通知のみ条件	公的自己意識低群	私的自己意識低群	4.03 <sup>a</sup> (1.30)	4.38 <sup>ab</sup> (1.42)	4.59 <sup>ab</sup> (1.38)	5.08 <sup>a</sup> (1.52)
		私的自己意識高群	4.00 <sup>a</sup> (1.31)	4.71 <sup>b</sup> (1.02)	4.83 <sup>b</sup> (1.10)	5.77 <sup>a</sup> (1.00)
	公的自己意識高群	私的自己意識低群	3.75 <sup>a</sup> (1.28)	4.69 <sup>a</sup> (1.12)	4.76 <sup>a</sup> (1.14)	5.84 <sup>a</sup> (1.10)
		私的自己意識高群	4.00 <sup>a</sup> (1.14)	4.69 <sup>a</sup> (1.18)	4.92 <sup>a</sup> (1.26)	6.12 <sup>a</sup> (.88)
通知+公表条件	公的自己意識低群	私的自己意識低群	3.97 <sup>a</sup> (1.42)	4.38 <sup>ab</sup> (1.62)	4.62 <sup>ab</sup> (1.61)	5.22 <sup>a</sup> (1.72)
		私的自己意識高群	4.00 <sup>a</sup> (1.32)	4.47 <sup>a</sup> (1.37)	4.66 <sup>a</sup> (1.36)	5.71 <sup>b</sup> (1.47)
	公的自己意識高群	私的自己意識低群	3.65 <sup>a</sup> (1.26)	4.35 <sup>ab</sup> (1.42)	4.54 <sup>a</sup> (1.30)	5.60 <sup>a</sup> (1.54)
		私的自己意識高群	3.76 <sup>a</sup> (1.20)	4.78 <sup>a</sup> (1.23)	4.78 <sup>a</sup> (1.33)	5.98 <sup>a</sup> (.95)
公表のみ条件	公的自己意識低群	私的自己意識低群	4.03 <sup>a</sup> (1.38)	4.30 <sup>a</sup> (1.44)	4.27 <sup>ab</sup> (1.39)	5.10 <sup>a</sup> (1.40)
		私的自己意識高群	3.77 <sup>a</sup> (1.12)	4.40 <sup>a</sup> (1.38)	4.44 <sup>a</sup> (1.32)	5.48 <sup>a</sup> (1.32)
	公的自己意識高群	私的自己意識低群	4.20 <sup>a</sup> (1.31)	4.27 <sup>a</sup> (1.40)	4.76 <sup>ab</sup> (1.20)	5.24 <sup>a</sup> (1.76)
		私的自己意識高群	3.70 <sup>a</sup> (1.25)	4.55 <sup>a</sup> (1.28)	5.00 <sup>a</sup> (1.06)	5.77 <sup>a</sup> (1.36)

\*「課題選好」の値は、高得点であるほど、実験参加者が当該課題をやってみたいと考えていたことを意味する。  
 \* 平均値の右肩の英小文字は、Tukey法による多重範囲検定の結果を示した。同一行で同一英小文字が付く各群の平均値間では、5%水準で有意な差がないことを意味する。

これらの結果より、全体的傾向として、最も診断性の高い課題Dを選択した実験参加者が多かったこと、ならびに、私的自己意識の高い実験参加者は、診断性の高い課題をより選択していたのに対して、公的自己意識の高い実験参加者は、自己の能力が高いかどうかを診断可能な課題をより選択していたことが明らかになった。

**能力診断課題の選好** 3（実験条件）×2（公的自己意識）×2（私的自己意識）の各群別に、課題の選好の平均値と標準偏差を算出し、その結果を表5に示した。

実験条件や自己意識の高低によって、これらの平均値にどのような差異があるのかを知るために、3（実験条件：通知のみ/通知+公表/公表のみ）×2（公的自己意識：高/低）×2（私的自己意識：高/低）×2（成功時診断性：高/低）×2（失敗時診断性：高/低）の5要因分散分析（成功時診断性と失敗時診断性については繰り返し変数）を実施した。その結果、成功時（ $F_{(1,492)}=420.93, p<.001$ ）と失敗時（ $F_{(1,492)}=264.78, p<.001$ ）の診断性の主効果が有意であり、診断性の高い課題がそれぞれ好まれていたこと、ならびに、成功時診断性×失敗時診断性の交互作用が有意であった（ $F_{(1,492)}=15.55, p<.001$ ）。この交互作用について下位検定を実施した結果、失敗時の診断性が低い場合の成功時診断性低課題（課題A； $M=3.90$ ）と高課題（課題B； $M=4.50$ ）との間（ $F_{(1,492)}=158.73, p<.001$ ）、失敗時の診断性が高い場合の成功時診断性低課題（課題C； $M=4.68$ ）と高課題（課題D； $M=5.58$ ）との間（ $F_{(1,492)}=358.76, p<.001$ ）、成功

時の診断性が低い場合の失敗時診断性低課題（課題A）と高課題（課題C）との間（ $F_{(1,492)}=88.26, p<.001$ ）、成功時の診断性が高い場合の失敗時診断性低課題（課題B）と高課題（課題D）との間（ $F_{(1,492)}=254.39, p<.001$ ）で、いずれも診断性の低い課題よりも診断性の高い課題が選好されていた。下位検定、ならびに、平均値のパターンから見て、この交互作用は、成功時・失敗時ともに診断性の高い課題Dが最も好まれていたことによるものであることが明らかになった。また、私的自己意識の主効果が有意であり（ $F_{(1,492)}=4.60, p<.05$ ）、私的自己意識の高い個人の方が、課題選好の平均値が高いことが示された。

その他の交互作用では、公的自己意識×成功時診断性（ $F_{(1,492)}=11.16, p<.01$ ）、公的自己意識×失敗時診断性（ $F_{(1,492)}=4.36, p<.01$ ）、私的自己意識×成功時診断性（ $F_{(1,492)}=7.48, p<.01$ ）、私的自己意識×失敗時診断性（ $F_{(1,492)}=8.98, p<.01$ ）がそれぞれ有意であり、下位検定の結果、いずれの交互作用においても（成功時の公的高群： $F_{(1,278)}=289.67, p<.001$ ；成功時の公的低群： $F_{(1,224)}=164.03, p<.001$ ；成功時の私的高群： $F_{(1,259)}=269.89, p<.001$ ；成功時の私的低群： $F_{(1,243)}=180.58, p<.001$ ；失敗時の公的高群： $F_{(1,278)}=166.76, p<.001$ ；失敗時の公的低群： $F_{(1,224)}=114.80, p<.001$ ；失敗時の私的高群： $F_{(1,259)}=217.17, p<.001$ ；失敗時の私的低群： $F_{(1,243)}=85.56, p<.001$ ）、診断性高課題は診断性低課題よりも好まれており、かつ、診断性低課題では、自己意識の高低による選好の差異は認められなかった（成功時低課題における公的自己意識：



## 自己意識特性が正確な能力診断が可能な課題の選好に及ぼす影響

$F_{(1,492)}=.00$ ,  $n.s.$ ; 成功時低課題における私的自己意識:  $F_{(1,492)}=.53$ ,  $n.s.$ ; 失敗時低課題における公的自己意識:  $F_{(1,492)}=.27$ ,  $n.s.$ ; 失敗時低課題における私的自己意識:  $F_{(1,492)}=.36$ ,  $n.s.$ ) のに対して, 診断性高課題では, 自己意識の高い個人の方が, 診断性の高い課題をより好んでいた (成功時高課題における公的自己意識:  $F_{(1,492)}=8.03$ ,  $p<.01$ ; 成功時高課題における私的自己意識:  $F_{(1,492)}=9.26$ ,  $p<.01$ ; 失敗時高課題における公的自己意識:  $F_{(1,492)}=5.16$ ,  $p<.05$ ; 失敗時高課題における私的自己意識:  $F_{(1,492)}=9.78$ ,  $p<.01$ )。なお, 公的自己意識の高低×成功時診断性の高低別の課題選好の平均値について, 図1に示した (自己意識と課題の診断性に関するその他の交互作用についても, 平均値のパターンは図1と同様であった)。

さらに, 条件×公的自己意識×失敗時診断性の交互作用が有意 ( $F_{(2,492)}=3.37$ ,  $p<.05$ ) であったので, 下位検定として, まず, 実験条件ごとに, 公的自己意識と失敗時診断性の単純主効果と単純交互作用について検討した。その結果, 通知のみ条件では, 失敗時診断性の単純主効果が有意であり ( $F_{(1,170)}=127.80$ ,  $p<.001$ ), 診断性の低い課題よりも, 診断性の高い課題が好まれていた。しかし, この単純主効果は単純交互作用によって限定されており ( $F_{(1,170)}=6.56$ ,  $p<.05$ ), 公的自己意識低群 ( $F_{(1,71)}=35.67$ ,  $p<.001$ ), 高群 ( $F_{(1,99)}=108.71$ ,  $p<.001$ ) とともに診断性低課題よりも診断性高課題が好まれていたが, 診断性低課題 ( $F_{(1,170)}=.00$ ,  $n.s.$ ) では, 公的自己意識の高低による差異が認められなかったのに対して, 診断性高課題 ( $F_{(1,170)}=4.96$ ,  $p<.05$ ) では, 公的自己意識低群と比較して, 高群は課題をより好んでいた。

通知+公表条件でも, 失敗時診断性の単純主効果が有意であり ( $F_{(1,167)}=103.20$ ,  $p<.001$ ), 診断性の低い課題よりも, 診断性の高い課題が好まれて

いた。この単純主効果も単純交互作用によって限定されており ( $F_{(1,167)}=5.08$ ,  $p<.05$ ), 公的自己意識低群 ( $F_{(1,74)}=33.14$ ,  $p<.001$ ), 高群 ( $F_{(1,93)}=77.40$ ,  $p<.001$ ) とともに診断性低課題よりも診断性高課題が好まれていた。しかしながら, 通知+公表条件では, 診断性低課題 ( $F_{(1,167)}=.56$ ,  $n.s.$ ), 高課題 ( $F_{(1,167)}=1.42$ ,  $n.s.$ ) とともに, 公的自己意識の高低によって, 課題選好の平均値に有意差は認められなかった。

公表のみ条件では, 失敗時診断性の単純主効果のみが有意であり ( $F_{(1,161)}=53.87$ ,  $p<.001$ ), 診断性の低い課題よりも, 診断性の高い課題が好まれていた。なお, これらの下位検定の結果について, 図2に示した。

次に, 公的自己意識の高低別に, 実験条件と失敗時診断性の単純主効果と単純交互作用について検討した結果, 公的自己意識低群では, 失敗時診断性の単純主効果のみが有意であり ( $F_{(1,222)}=113.46$ ,  $p<.001$ ), 実験参加者は, 診断性の低い課題よりも, 高い課題をより好んでいた。一方, 公的自己意識高群においても, 失敗時診断性の単純主効果が有意であり ( $F_{(1,276)}=165.55$ ,  $p<.001$ ), 診断性の低い課題よりも, 高い課題がより好まれていた。しかし, この単純主効果は, 実験条件×失敗時診断性の単純交互作用による限定を受けていた。失敗時診断性が低い課題の場合には, 課題選好に関しては, 実験条件による差異は認められなかった ( $F_{(2,555)}=1.53$ ,  $n.s.$ ) のに対して, 失敗時診断性が高い課題の場合には, 実験条件の単純・単純主効果が有意であり ( $F_{(2,555)}=3.13$ ,  $p<.05$ ), Tukey法による多重範囲検定の結果, 通知のみ条件 ( $M=5.34$ ) と公表のみ条件 ( $M=4.96$ ) との間に有意差が認められた。この単純・単純交互作用の結果について, 図3に示した。

なお, 実験条件×公的自己意識×失敗時診断性

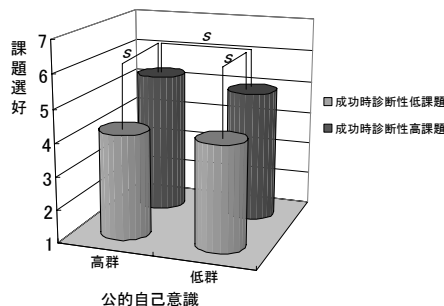


図1 公的自己意識の高低×成功時診断性の高低別「課題選好」の平均値

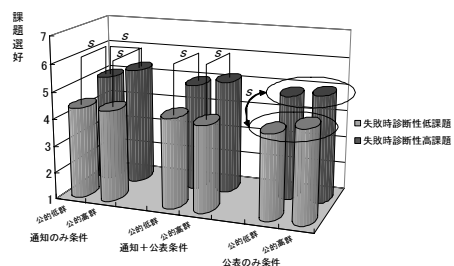


図2 実験条件×公的自己意識の高低×失敗時診断性の高低別「課題選好」の平均値

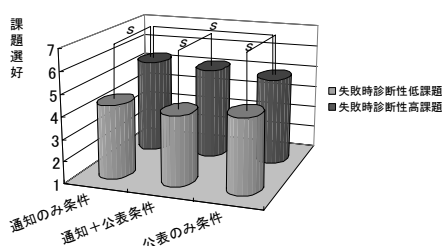


図3 実験条件×失敗時診断性の高低別「課題選好」の平均値（公的自己意識高群）

の交互作用が有意であったのに対して、実験条件×公的自己意識×成功時診断性の交互作用 ( $F_{(2,492)}=.11, n.s.$ ), 実験条件×私的自己意識×失敗時診断性の交互作用 ( $F_{(2,492)}=.55, n.s.$ ), 実験条件×私的自己意識×成功時診断性の交互作用 ( $F_{(2,492)}=1.01, n.s.$ ) は、いずれも有意ではなかった。

これらの結果から、全体的傾向として、私的、公的にかかわらず、自己意識の高い個人は、低い個人と比較して、自己の能力が高いことを明らかにする課題であれ、低いことを明らかにする課題であれ、自己の能力がより判明する課題を選好することが示された。また、公的自己意識の高い個人は、通知のみ条件と比較すると、通知+公表条件や公表のみ条件において、自己の低能力が明らかになる課題を選好する傾向が相対的に低くなることが明らかになった。一方、私的自己意識の高い個人は、設定した実験条件や課題の診断性の如何にかかわらず、自己の能力が明らかになる課題を常に選好する傾向にあることが明らかになった。

## 考察

本研究の目的は、自己の能力が他者に公表される状況と公表されない状況において、自己意識特性が自己査定の行動にどのような影響を及ぼすのかについて、4つの仮説を検討することであった。

本研究では、自己査定の行動の指標として、実験参加者が、自己の能力が明確になる程度の異なる4種類の課題を選択し、または、選好する程度を測定した。この指標が妥当性の高いものであるためには、実験参加者が、各課題の持つ診断性を正しく理解している必要がある。この点について確認するために、実験参加者の課題の診断性知覚について検討した。表2、ならびに、多重範囲検定の結果から、3（実験条件）×2（公的自己意識）×2（私的自己意識）のすべての群において、課

題の診断性知覚の平均値は、課題A<課題B=課題C<課題Dの順になっていた。このことより、実験参加者は、各課題の持つ診断性の特徴を理解していたものと考えられる。

また、診断結果を他者に公表する状況を設定した目的は、診断結果が他者に公表されることによって、実験参加者の自己呈示動機を高め、自己査定動機と葛藤させることにあった。この実験操作が有効であったかどうかを確認するために、実験参加者に対して、課題を選択した際に、他者の目を意識した程度について質問した。表3、ならびに、分散分析の結果より、通知のみ条件と通知+公表条件との間には、想定した方向での有意差が認められたものの、通知のみ条件と公表のみ条件、ならびに、通知+公表条件と公表条件の間には有意差は認められず、実験操作が必ずしも成功していないことが示された。

このことの理由としては、公表のみ条件の状況設定に問題があった可能性が考えられる。公表のみ条件では、自分の診断結果は、会話実験のパートナーにのみ知らされるのだが、同時に、実験参加者は、パートナーの診断結果を知ることができるという状況にあった。このような状況では、実験参加者は、自分の診断結果を「見られる」ことよりも、他者の診断結果を「見る」ことにより注意を向けたために、通知+公表条件ほどには、他者の目を意識しなかったのではないと思われる。

表4に示したように、本研究において、最もやってみたい課題として実験参加者が選択した課題は、すべての群において最も診断性の高い課題Dであり、その選択率は56.67%~89.80%であった。この結果は、本研究の前提となる自己査定理論を支持するものであり、少なくとも実験参加者の半数以上は、様々な状況において、自己の能力を正確に知ることが可能な課題を選択することを示している。また、本研究における課題Dの選択率は、先行研究における課題Dの選択率よりも高かった。これは、診断する能力として本研究が設定した『潜在的恋愛能力』が、実験参加者にとって関心が高く、自己査定動機を喚起させやすい能力であったためであると考えられる。

課題選択と自己意識特性との関係を見ると、私的自己意識の高い実験参加者は、診断性の高い課題をより選択していたのに対して、公的自己意識の高い実験参加者は、自己の能力が高いかどうかを診断可能な課題をより選択していたことが明らかになった。この結果は、仮説2と仮説3を支持

する方向の結果ではあるものの、本研究で重視した状況の差異は、課題選択には影響を及ぼしていなかった。このことの理由としては、前述したように、本研究では、課題D、つまり、最も診断性の高い課題を選択した実験参加者が最も多かったことによる可能性が考えられる。本研究のように、自己査定動機を喚起させやすい能力に対して、診断性の異なる4つの課題の中からひとつの課題を選択するような場合には、状況要因はそれほど大きな影響を及ぼさない可能性をこの結果は示しているのかもしれない。

課題選好についても、表5に示したように、全体的傾向としては、いずれの群においても、最も診断性の高い課題Dが、その他の課題よりも選好されていることが明らかになった。また、分散分析の結果より、2（公的／私的自己意識）×2（成功時／失敗時診断性）の4つの交互作用がいずれも有意であり、下位検定の結果、公的／私的自己意識の高い個人は、低い個人と比較して、診断性の高い課題をより選好していることが示された。これらの結果は、仮説1を支持するものであった。

また、実験条件×公的自己意識×失敗時診断性の交互作用が有意であり、下位検定の結果、公的自己意識の高い個人は、通知のみ条件と比較すると、通知+公表条件や公表のみ条件において、自己の低能力が明らかになる課題を選好する傾向が相対的に低くなる傾向が示された。この結果は、仮説2を支持するものであった。一方、私的自己意識の高い個人は、設定した実験条件や課題の診断性の如何にかかわらず、自己の能力が明らかになる課題を常に選好していた。この結果は、仮説3を支持するものであった。

なお、通知のみ条件では、公的自己意識の高い個人に関しては、自分が診断結果を知ることができない状況において、自己の低能力が明らかになる課題を避ける傾向にあるという予測どおりの結果が得られたが、私的自己意識の高い個人に関しては、自分が診断結果を知ることができないにもかかわらず、診断性の高い課題が選好されており、仮説4は支持されなかった。このことの理由としては、私的自己意識の高い個人は、他者からの評価を気にしないために、ありのままの自分を見せることに抵抗を感じなかった可能性や、他者に対して、自己の印象を統制しようという自己呈示動機を働かせにくかった可能性が考えられる。さらに、前述したように、公表のみ条件では、「他者の目を意識させる」という実験操作が必ずしも成功していなかった。したがって、他者の目をより意

識させることができたなら、私的自己意識の高い個人にも自己呈示動機が働き、自己査定の行動を取らなくなるようになるかもしれない。この点については、今後の検討課題である。

また、その他の実験操作上の問題点として、自己査定の行動の指標として用いた課題の診断性についての理解のしにくさもあげられる。前述したように、平均値レベルで確認した結果では、実験参加者は課題の診断性を正しく理解していたものの、参加者ひとりひとりの理解度を確認すると、すべての課題について、診断性を正しく理解していた（つまり、課題A<課題B=課題C<課題Dという関係を理解していた）実験参加者は、全体の約60%であり、少なくとも課題Dの診断性が最も高いことを理解していた実験参加者を含めても、その理解度は約70%であった。

本研究で使用した能力診断課題は、自己査定動機研究において、これまで一般的に用いられてきた課題であり、かつ、能力の高低が明らかになる程度の説明文を各課題ごとに提示するなど、課題の診断性に対して、非常に丁寧な説明をおこなった。それにもかかわらず、約30%の実験参加者は、課題の診断性の特徴について正しく理解していなかったことから、課題の提示や説明方法に関して、さらに改善する必要があると考えられる。

本研究では、診断する能力として、自己査定の行動が生じやすいと思われる『潜在的恋愛能力』を設定した。この能力に関しては、ほとんどの実験参加者（91.9%）が、自己の能力を低いと認知していた。自己の能力が低いと認知している個人は、診断性の高い課題に取り組むことによって、低能力が判明する可能性が高いと判断することから、その結果が他者に公表されることに抵抗を感じる者は、自己査定の行動を取りにくくなると考えられる。しかし、能力に対する自己評価が十分高い場合には、診断性の高い課題を選択しても、低能力が明らかになる可能性が低いと判断するため、能力の診断結果が他者に公表される場合においても、性格特性にかかわらず、自己査定の行動が取られる可能性も考えられる。この点についても、さらに検討することが必要であろう。

このように、本研究の結果を一般化するためには、いくつかの問題が存在するものの、仮説4を除くと、本研究で設定した仮説はほぼ支持されたものと考えられる。

越（1994）は、診断する能力に対して、その能力を獲得することを目標としない個人は、自己査定の行動を取りにくく、課題遂行に対する意欲や

動機づけが低下することを示唆している。本研究において、公的自己意識の高い個人は、診断結果を自分だけを知ることができる場合には、自己査定の行動を取っていたことから、課題遂行に対して、意欲や動機づけを持っていたものと考えられる。しかし、診断結果が他者に公表されるような場合には、自己査定の行動を取りにくくなる傾向が示された。このことは、公的自己意識の高い個人にとって、自己の能力が他者に公表されるという状況は、課題遂行に対する意欲や動機づけを低下させる可能性のある状況であることを意味しているのかもしれない。

本研究の結果から、人は、基本的には自己の能力を正確に把握するように動機づけられているが、常に自己査定の行動が取られるわけではなく、自己査定動機と他の動機が葛藤するような場合には、個人の性格によっては、自己査定動機以外の動機が優先される可能性のあることが示された。このように、自己査定の行動の規程因として、状況要因と性格特性との交互作用を考慮する必要があることを示唆した点で、本研究の結果は意義あるものと考えられる。また、適正処遇交互作用の観点からも、本研究の結果は、重要な示唆を与えてくれるものと思われる。

## 引用文献

- Duval, S. & Wicklund, R. A. 1972 *A theory of objective self awareness*. New York: Academic Press.
- Duval, S. & Wicklund, R. A. 1973 Effects of objective self-awareness on attribution of causality. *Journal of Experimental Social Psychology*, **9**, 17-31.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 544-554.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 2003 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, **11**, 86-98.
- 越良子 1994 目標と達成可能性認知が自己査定行動の生起に及ぼす影響 心理学研究, **65**, 116-129.
- 越良子 1996 能力の自己査定行動と自己高揚期待 心理学研究, **67**, 42-49.
- 沼崎誠 1991 自己能力診断が可能な課題の選好を規定する要因：自己査定動機・自己高揚動機の個人差と性差 心理学研究, **62**, 16-23.
- 沼崎誠 1992 自己能力診断が可能な課題の選好を規定する要因（2）—能力の統制可能性と重要・有益性および自己能力予測— 実験社会心理学研究, **32**, 15-26.
- 沼崎誠・工藤恵理子 1995 自己の性格特性の判断に関わる課題の選好を規定する要因の検討 —自己査定動機・自己確認動機— 心理学研究, **66**, 52-57.
- 沼崎誠 2001 自己査定 山本真理子・外山みどり・池上知子・遠藤由美・北村英哉・宮本聡介（編）社会的認知ハンドブック 北大路書房 p. 42.
- 押見輝男 1992 自分を見つめる自分 —自己フォーカスの社会心理学— サイエンス社
- Pryor, J. R., Gibbons, F. X., Wicklund, R. A., Fazio, R. H., & Hood, R. 1977 Self-focused attention and self-report validity. *Journal of Personality*, **45**, 513-527.
- Scheier, M. F., Carver, C. S., & Gibbons, F. X. 1979 Self-focused attention, awareness of bodily states, and suggestibility. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1576-1588.
- 菅原健介 1984 自己意識尺度 (Self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188.
- Trope, Y. 1975 Seeking information about one's own ability as a determinant of choice among tasks. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 1004-1013.
- Trope, Y. 1983 Self-assessment in Achievement behavior. In J. Suls, & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp. 93-121.
- 辻岡美延・遠藤充 1994 課題選択における2理論 —自己高揚理論と自己査定理論をめぐって— 関西大学社会学部紀要, **26**, 35-64.